

<書評>堤純編：『変貌する現代オーストラリアの都市社会』

著者	磯野 巧
雑誌名	地理空間
巻	11
号	1
ページ	82-84
発行年	2018-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156802

堤 純編：『変貌する現代オーストラリアの都市社会』筑波大学出版会，2018年3月刊，176p.，3,500円（税別）

本書の目的は、多文化化の進むオーストラリアの都市社会に着目し、各エスニックグループの特徴を大都市圏の構造から捉えることで、現代オーストラリアの都市社会の特徴を明らかにすることである。オーストラリアでは多文化主義政策が導入された1970年代以降、移民による人口の社会増加が顕著となった。1960年代頃まではイギリスやアイルランド出身の移民が大半を占めていたが、今日ではその割合が減少し、アジア太平洋地域、中東やアフリカ諸国からの移民が急増している（田中，2011）。2016年の国勢調査によると、海外生まれ人口の出身国は、イギリス（3.9%）、ニュージーランド（2.2%）、中国（2.2%）、インド（1.9%）、フィリピン（1.0%）の順に多い¹⁾。しかしながら、2011年と比較すると、イギリス（4.2%）出身者の割合は下降しているのに対し、中国（1.5%）やインド（1.4%）、フィリピン（0.8%）のそれは大きく上昇している²⁾。また、2016年の総人口23,401,892に占める海外生まれ人口の割合は33.3%であり、2011年（30.2%）と比べて3.1ポイント増えている。

このように、海外生まれ人口、とりわけアジア系移民は増加の一途を辿っており、オーストラリア社会における彼らのプレゼンスは劇的に増加したと言われている。加えて、今日ではオーストラリアで生まれた移民2世や3世、あるいは英語能力が高く専門的な資格を持つ「新規移民」も増加しており、ひと口に移民といってもその生活様式や就業形態は多様性に富んでいる。よって、オーストラリアの「多文化社会」は極めて複雑な様相を呈しており、その実態を理解するためには、地域構造を把握したうえで個別事例を検証すること

が不可欠であるとされていた。それゆえに、丹念なフィールドワークに基づいてオーストラリアの多文化社会の実態や諸問題の解明を試みる本書の出版は、まさに時宜にかなったものと言えよう。

本書は大きく2部構成をとっており、第I部「オーストラリア大都市圏の構造変容」は序論を含む全5章、第II部「変貌する都市社会地理」は結論を含む全4章と、合計9章からなる。これらに加えて、オーストラリアの「今」を紹介した六つのコラム（高級食材のwagyu、アウトバックツーリズム（ウルル＝カタジュタ国立公園）と都市住民、都市郊外の森とカフェ、ワインとバーベキュー、多様性を活かした都市観光（LGBTツーリズム）、アウトバックの中国人）が設けられている。以下、序論と本論にあたるVIII章までの内容を簡潔に紹介する。

第I部では、大都市圏全体の構造変容の枠組みのなかで、現代オーストラリアの大都市圏の変容を扱っている。I章では、多文化社会に関わる現代オーストラリアの諸課題を整理したうえで、研究目的や方法、使用データについて概説している。また、主要都市の分布や都市別人口といった、オーストラリアの都市構造を理解するうえで必要となる基礎的な情報や、オーストラリア統計局（Australian Bureau of Statistics）の提供する国勢調査のデータとGISを組み合わせた定量分析の手法なども紹介している。II章では、シドニー大都市圏の構造変容について、都市の拡大過程や世界都市としての地域的性格に着目しつつ、エスニックグループ別の居住分布や家庭での使用言語、宗教の信仰者分布、高所得世帯の居住分布などを指標として分析している。III章では、シドニー大都市圏におけるフィリピン系移民の集住形態の特徴とその様相について、フィリピン生まれ人口のニュー・サウス・ウェールズ州およびシドニーへの集住傾向に触れながら、シドニー大都市圏にお

ける人口分布とその変化、彼らの母国語（フィリピン語ないしタガログ語）の使用状況を分析している。そのうえで、シドニー大都市圏においてフィリピン系移民がとくに集住するブラックタウン市を取り上げ、小地区でみたフィリピン系移民の集住傾向や景観に着目しながらエスニック都市空間の形成について詳しく解説している。Ⅳ章では、メルボルン大都市圏の構造変容について、都市の拡大過程および芸術や文化、教育、新興産業の集積といったシドニーと異なる地域的性格に着目しつつ、公共交通のみ利用ないし自家用車利用の都心通勤者の分布、エスニックコミュニティの分布、高所得者の分布などを指標として分析している。Ⅴ章では、メルボルンにおけるグローバリゼーションとコンドミニウム・ブームについて、「英語による高等教育」を知識産業として積極的に展開するオーストラリアの方針とそれを好評価するアジア諸国の関係性を踏まえつつ、1990年代初頭以降にみられた留学生の急増と、彼らが高層住宅開発やその変質過程、雇用などに与えた影響を考察している。

続く第Ⅱ部では、よりミクロなスケールから変貌する都市社会に焦点を当てている。具体的には、シドニー（Ⅵ章）、キャンベラ（Ⅶ章）、アデレード（Ⅷ章）のエスニック・タウンの様相が詳しく解説されている。Ⅵ章では、シドニー郊外のライカート地区を対象に、人口規模が縮小し、居住地が分散しつつあるシドニーのイタリア系コミュニティが、移民1世の元の集住地であったライカート地区にコミュニティの拠点を再構築しようとする試みを解説しており、現在でも同地区はイタリア系コミュニティの歴史的シンボルとしての価値を喪失していないことを明らかにした。Ⅶ章では、首都キャンベラにおける華人社会の特徴について、新興都市であるキャンベラの都市機能は政治・行政機能に特化しており、華人社会にお

いても公務員と学生が圧倒的に多く、それが他都市とは異なる「来豪年および収入によって分化する」都市構造を作り出していると指摘している。Ⅷ章では、アデレード郊外に居住するベトナム系移民の分布とその特徴について、来豪時期の長さや難民としての性格を併せもつベトナム系移民の概要を踏まえつつ、来豪時期によって移住した社会経済的な背景が異なっており、属性の違いが移民の職業選択や居住地選択といった意思決定や生活形態に及ぼした影響について考察している。

本書はオーストラリアへの豊富な渡航歴や在外研究歴、滞在歴をもつ7名の著者によって得られた大都市圏の多文化社会に関する実証的研究の成果である。その内容は各著者の専門分野や調査事例を反映して多岐にわたるが、いずれもエスニックグループの特徴を大都市圏の構造から捉えるという視点は共通している。また、国勢調査データなどの統計分析やGISを用いた地図解析といった調査手法を援用しつつも、いずれの著者も聞き取りや観察などフィールドワークに基づくデータ取得を重視している。ゆえに、本書は多文化化が進む現代オーストラリアの都市社会を総合的かつ多角的に、そして臨場感を味わいながら理解するには格好の書である。こうしたオーストラリアの「都市的な側面」は、そもそも日本では紹介されることがあまり多くない。ゆえに、都市の発展過程やモータリゼーションに伴う急激な郊外化の進展について詳細に紹介した本書は、オーストラリア大都市圏の地域的特徴やその動態を理解するのにも大きな助けとなるであろう。加えて、何かと話題にあがるLGBTと都市観光や2019年より観光客向けの登山が禁止になると報じられたウルルのツーリズム事情など、オーストラリアの「今」を知るためのコラムも充実しており、その内容も難解な専門用語を避けた平易な説明となっている。ゆえに、本書は学生や研究者のみならず、

オーストラリアに興味関心をもつ一般読者にも強く勧めたい一冊である。

本書ではオーストラリアの多文化社会について、とりわけアジア系のエスニックグループの特徴から論じていた。アジア諸国からの移民は着実に数を増やしており、中国系移民については「マイノリティの中のマジョリティ」としてその存在感を強めている。また、2000年代以降は中東諸国やアフリカ諸国からの移民も急増しており、その数は今後着実に増え続けるだろうと言われている。ゆえに、オーストラリアの都市社会は今後さらなる多文化化の進展が予想され、それに伴いエスニックグループもより一層複雑化すると思われる。加えて、コラムで取り上げられていたLGBTやアポリジニなども多文化主義を象徴する側面をもっており、事実、これらを題材とした多文化社会に関わる研究も確実に蓄積されつつある。今後はこうした近年の研究動向も踏まえつつ、ますます細分化されたオーストラリアの多文化社会の在り方を論じた学術研究書の出版が待ち望まれる。

(磯野 巧)

注

- 1) ABS 2016 Census QuickStats
http://www.censusdata.abs.gov.au/census_services/getproduct/census/2016/quickstat/036
(最終閲覧日：2018年5月5日)
- 2) ニュージーランド出身者の割合は2.2%である。

文 献

田中豊裕 (2011)：『豪州読本 オーストラリアをまるごと読む』大学教育出版。

菊地俊夫編著：『ツーリズムの地理学－観光から考える地域の魅力－』二宮書店，2018年3月刊，222p.，3,200円（税別）

本書は、首都大学東京の観光科学域に所縁のある地理学者を中心とする20人の執筆陣が多面的な観光現象を各自の視点から論じるという、かなり自由度の高い書物である。「自由度が高い」というのは決して揶揄ではない。読者は興味深い論考（章）から、きままに読み進めることが可能だ。

本書は大きく「都市」、「農村」、「自然」の三つのパートに収められた17本の論考と、序章・終章とあわせて19章から構成される。簡単に各論考の内容を紹介しよう。

1編「都市地域における観光研究」には、6本の論考が収められている。1章「東京・裏原宿におけるアパレル小売店の集積に関する研究」（矢部直人）では、アパレル小売店が集積する「裏原宿」地域を取り上げ、アパレル小売店の集積過程および集積の意味について考察した。

2章「東京・隅田川における河川交通の変遷と観光の可能性」（太田 慧）では、東京の河川ならびに臨海部を対象とした東京ウォーターフロントにおける水上バス航路の変遷と、運航船舶の多様化による観光アトラクション機能の変化を議論した。

3章「東京・小平市におけるオープンガーデンの活用と地域資源の連携」（小池拓矢）では、行政主導のオープンガーデンを行っている東京都小平市を挙げ、オープンガーデンへの来訪者に対する調査を通して、地域におけるオープンガーデンの特徴と機能を考察した。

4章「ベルギー・国際都市ブリュッセルにおけるMICE」（杉本興運）では、ヨーロッパ屈指の国際都市・ブリュッセルにおける観光やMICE（ビジネスイベント）にみる文化・交流機能の特